「安倍政権」が残したものは

大阪市立中央図書館ですこし遅れて、東京新聞を再び読めるようになった。8月2日夕刊の西谷修さん表題論稿に注目したので、途中まで紹介したい。

安倍晋三元首相が稀有の政治家だったことは確かだ。だが、合わせて8年8カ月もの長期に及んだ安倍政権の功罪はしっかりと考えなければならない。これまでの自民党政治家には「自分は権力を正しく使えているだろうか」という節度があったので、引き際を知る。だが、安倍氏は「自分は総理大臣だ。だから正しい」との姿勢だった。

立法をチェックすべき内閣法制局長官を交代させたことが典型例だ。それまで憲法や法律の解釈は、整合性の観点から勝手に変更できないとされてきたが、そういうことを言わない人に代えた。禁じ手を平気で使う。すると「すごい首相だ」ということになる。

結果、閣議決定で何でもできるようになった。権力行使に歯止めが失われ、政治は底板が抜けて液状化してしまった。アベノミクスも、安全保障法制にしても、この政治手法が可能にした。国会での議論さえ成り立たないので、立法府のチェック機能も働かない。こうした構造は周囲があってこそだ。官僚たちは、節度の無さに逆に守られて好きにできるので付いていく。「自発的隷従」というもので、森友学園問題では忖度して公文書の改ざんを始めた。自ら指示しているわけでないから、安倍氏は無垢のまま、悪くないとなる。政治家も「安倍さん、すごい」と言って支え、安倍氏を批判すると「許せない」となる。

銃撃で亡くなったのは、誰であれ痛ましいことで、冥福を祈りたい。しかし、それが「民主主義への攻撃だ」「テロだ」と言われると、まるで安倍氏が民主主義を代表していたような話になる。「ちょっと待ってくれ」と思うが、「多大な貢献があった」として、あっという間に閣議で、日本最高位の勲章に当たる大勲位菊花章頸飾を贈ると決定された。こうした政治プロセスは不可逆的は段階にまできている。

安倍氏が退任後率いた自民党内最大派閥の安倍派の行方がどうなるか分からない。だが、安倍氏の「遺志を継ぐ」という政治勢力がいる限り、岸田文雄首相は首相で居続けるために、安倍派の議員を取り込もうとするだろう。自らの政治理念があっても首相はこの道を進まざるを得ないのだ。

首相は記者会見で「偉大なリーダーを失った。思いを受け継ぎ、憲法改正など果たせなかった難題に取り組む」と言った。「亡くなった人は尊く、その悲願を達成していく」と。しかし、それは民主政治ではなく、もはや宗教だろう。「安倍政治とは何だったのか」と問うこと自体がひつぎに入れられ、花に飾られふたに覆われていく。

しかも法的根拠もない国葬までやって、たたえようとする。これでは安倍氏の神格化だ。安倍的な政治がこのまま、あるべき日本の政治の姿になっていく。メディアは、ここで大きな役割を果たしていることを自覚しなければならない。

（2022年9月2日）